

より効果的なプロジェクトベース型教育(PBL)を目指して

— 学習者の意識の変化と課題を探る —

寺川 佐和子 奈良育英中学・高等学校

1. はじめに

本校は、奈良市中心部にあり、神社仏閣も多く、歴史や文化を身近に感じられる恵まれた環境にある。

2016年に創立100周年を迎える本校は2015年4月より「国際理解Gコース」を新設した。このコースでは、現代社会における多文化共生社会において、多様な文化的・社会的背景をもつ人々と積極的に関わりあいながら、社会を切り開くことができる人材の育成を目指している。そして、生徒の自発的な活動を促すためにプロジェクトベース型学習の考え方に基づいたカリキュラムを展開している。学習者自らが課題を発見し、情報を収集・分析しながら主体的に問題解決をする中で、「何のために」「何をするか」を明確に意識させることがねらいである。そうすることで生徒はモチベーションを持続し、より一層「意志ある学び」^①を実現すると考えている。

2. 育てたい生徒像と身につけたい力

国際理解Gコースで目指す人材は Global Citizen「地球市民」である。これは、優れた語学力だけではなく、多角的な視点で世界の諸問題に目を向け、自己と世界とのつながりを意識し、答えの出ない課題について主体的に考え、対話し、行動できる人材を意味している。

世界には環境破壊や貧困、様々な差別や紛争など多くの問題がある。これらを自分には直接的な影響がない、自分には無関係なものとしてとらえては本当の意味で global な人材とは言えない。まずは、これらの問題に目を向け、知ろうとする意志を持つ必要がある。そして常に疑

問を持ち、自分には何ができるのかを考え、具体的に行動することで自身が社会に貢献できるかけがえのない存在であることに気づくだろう。

国際理解Gコースでは、これらのことをふまえ、3年間を通して生徒に以下の力を身につけさせる。

- | |
|---|
| ①主体的な課題発見・問題解決能力
②自他を尊重し、多様な人々とつながる力
③ICT活用力、語学力、コミュニケーション力 |
|---|

3. プロジェクトに基づくカリキュラム

国際理解Gコースでは、卒業後の姿を見すえ各学年の目標を以下のように設定した。

- 1年次 … ニュージーランドへの3カ月留学
- 2年次 … 国際プレゼンテーション大会
- 3年次 … 英語による卒業論文

1年次は多様な人と積極的に関わろうとする態度を、2年次では海外チームとの協働プレゼンテーション、そして3年次で地球規模の課題に関する論文を書き、進路目標につなげていく。これらの3年間を通したプロジェクトのうち、1期目の今年は、3カ月留学の成功に向けて取り組んできた。入学した理由は「グローバルな人材になりたい」「英語を通して視野を広げ多くの人と関わりたい」「将来英語を活かした仕事に就きたい」など様々で、入学当初の英語力は英検3級～2級レベルまで多少の差があった。しかし、留学という同じ目標があるため意識が高く、クラスの中でもピアラーニングが自動的に起こり励まし合いながら学習に取り組む姿が見られた。

以下に授業での具体的な取り組みを紹介する。

(1) 考えさせる授業

国際理解 G コースの授業の 1 つに Global Studies がある。これは世界の諸問題に関心を持ち、その背景や課題を探りながら、主体的に関わる態度の育成を目標にしている。さらにマインドマップやファシリテーターの役割、コンピューターリテラシーなど、議論や情報収集をする際に必要な技術の習得も目指している。さらにこれは 2 年次での国際プレゼンテーション活動でも重要な要素になることを生徒に意識させた。また、原則的に英語で意見交換をするので英語運用力も求められる。一方、教師としての役割は、いかに生徒の思考を深化できるかである。ある日の授業では DVD 『トレランス』^② を用いて行った。視聴後、教師は内容について質問をした。登場人物はだれか、どのような状況か、最後の結末は…など。生徒は質問に対して英語で答えなければならない。もし適切な言葉が浮かばなくてもすぐに教師が答えを出さずヒントを与えて他の表現で言えないかを考えさせた。伝えたい意見があるのに言葉が出ないからとあきらめるのではなく、どうすれば伝えられるかを考える力も、対話や交渉の場面で大切だからだ。このような授業中のちょっとしたやりとりにおいても、活動の意味や意図を生徒が認識・理解することで、学ぶ姿勢や意欲は向上する。解決策（この場合は異なる言い方）を探り、最終的に「別の表現で伝えられた」「わかった」という経験が次の学びへの動機付けになる。

犬塚 (1988) が学習意欲の研究でも指摘しているように、「学習の主体的意味づけがなされた時、また感動体験や成功体験（ある時には挫折からの這い上がり体験）を持ち得た時に、学習意欲が喚起される」^③ からだ。

また、一連の説明の中で“fortress” という英単語がでてきた時は、その意味が理解できない生徒もいた。しかし、このような場面でも教師がすぐに意味を教えてしまうと生徒の学びのチ

ャンスを減らしてしまうことになる。ここで教師が与えたヒントは「That's would be like a large building or structure, which is difficult to destroy. And it is a kind of building used for the battle…」だった。わずかこれだけの短い英語だが、生徒にはヒントになる語がいくつかあった。building, destroy, battle などの単語や DVD の内容から想起すれば fortress の意味も推測することができる。

この DVD では氷河期から目覚めた 2 人の原始人が、自らの文明の防御のために互いを攻撃し始め、最後には双方とも激しく傷ついてしまう。なぜ彼らが争いを始めたのか明示されないが、DVD の視聴を通して人間にとっての“戦い”とは何かについて考えさせた。世の中には、ボクシングや歌合戦などの道徳的に許される“戦い”と戦争など人を殺傷する道徳的に許されな“戦い”がある。まず後者について、なぜ道徳的になぜ許されないのか、生徒からは次のような意見が出た。

- ・戦争をしても（問題の）解決にならない
- ・戦争は無関係の人まで巻き込まれる
- ・暴力では何も変わらない

これに対してもう一方の道徳的に許される戦いについては次のように意見が分かれた。

〈容認できない〉

- ・スポーツでも肉体的に傷つけられる
- ・相手を殴るのでこれも暴力だ

〈容認できる〉

- ・やりたい人同士が戦っている
- ・戦争と違って無関係の人は傷つかない
- ・男の人は戦うことが好き
- ・観客も楽しめる

ここで留意させた点は、自分の意見に対して必ず理由を述べるということだ。「私は～だと思

ます。なぜなら…だからです。」のように理由を意識することで考えが明確になり、意見に自信を持つことができる。また聞き手にとっても説得力のある言葉として理解される。(このような伝え方の訓練については、言語技術の授業でも問答ゲームや再話、絵の分析などを通して積極的に取り入れ、英語だけではなく他教科とも連動してプロジェクトに取り組んでいる。)

また、単にどちらが正解・不正解ということではなく、他者の意見を通して多様な考え方に気付かせることもねらいとしている。

戦争が起きるのはなぜか。文化や宗教、個々の価値観は人それぞれだが「自分とは異なる」からといって他者を排除したり、優劣をつけることは間違っている。世界では争いや戦争が続いている。それを遠い国のこととして考えるのではなく、当事者意識をもって考える必要性を学ばせた。「学んだことを広げ、外国での考え方も学びたい」という生徒の感想は、学びを通じた意識の変化の表れだといえる。

(2) コミュニケーション力と相互評価

少人数のこのコースは1人の感情や発言、行動が他の生徒にも影響を与えやすく、全員で活動する際も、個々の役割や責任は大きくなる。少人数でまとまりやすい場合もあれば個性がぶつかり合う時もある。しかしより良い学びを作るには、自分の意見を明確に伝えること、質問すること、建設的な批評・反論も率直に言い合えることが大切である。察し合うことを重んじる日本語文化では意見を激しくかわしたり、自分の意見に質問や反論されることにあまり慣れていない。一方、英語文化ではこれらは自然なことと考えられている。実際に欧米などでは授業で peer review (相互評価) ⁴⁾ が活用され、幼い子ども同士でも互いの作文や発表について自由に意見交換をするそう。

国際理解 G コースでも、全ての授業の中で次のことを意識して活動に取り組みさせた。

- ① 単語ではなく文章で答える。
- ② 相手を意識して分かりやすく伝える。
- ③ 質問に対する意思表示を明確にする。
- ④ 相手に関心をもち積極的に質問をしたり意見を出し合う。

これらは全て基本的なことだが、人とのコミュニケーションをはかるうえではとても大切なことである。例えば①について、AさんとBさんの会話の中で、

A : What did you do last night?

B : TV.

というやり取りがあるとすると、Aさんの問いに対するBさんの応答は、十分理解はできる。しかしこれは親しい者同士だから成立するが、例えば、あまり面識のない相手にこのような返答をするとどんな印象を与えるだろうか。もちろん状況にもよるが、もしかすると相手には大変失礼な態度に聞こえるかもしれない。

Bさんの返答としては、

“Well, I watched a baseball game on TV.

It was very exciting and ….”

のようにすると次への会話や質問につながりやすくなる。

英会話の授業の中でも、発話や返答の仕方について生徒はALTから繰り返し指摘を受けた。ALTの発問に対して、“Yes.” “No.”の一言で答えたり、分からないことに対して質問しようとしなかったからだ。

“ I know what you mean, but please say that again ….”

“ Why do you think so? ”

“ So what? ”

ALTの容赦ないこれらの質問に対して、最初は苦戦する生徒もいたが、何度も歯がゆい思いを

重ね、相手を意識した発話が少しずつできるようになってきた。しかしまだまだ十分とは言えない。声の大きさや表情、態度の面でアドバイスを受ける場面も多くあった。特に、関わろうとする気持ちが大切だ、という助言は現在留学中の生徒たちが最も体感しているのではないだろうか。

以上、主に2つの授業での取り組みについてみてきたが、国際理解Gコースでは活動後の振り返りを行い、内容や発表の仕方について個人やグループで検証した。

- ・英語でプレゼンテーションをする前には日本語でその内容を十分に理解すべきだ。
- ・英語力だけでなく、聞き手を意識したプレゼンテーション能力の向上が不可欠だ。
- ・グループ内での作業量のバランスが大切だ。
- ・準備時間をもっと確保したい。
- ・プレゼンテーションは役に立つので続けたい。

活動後のこのような気づきが次への改善につながった。

4. おわりに

入学からの約10カ月、生徒たちは留学に向けて様々な準備を重ねてきた。語学力をつけることはもちろんのこと、情報収集の仕方や人とのコミュニケーションの取りかたなどだ。時にはゲストスピーカーとして大学生を招いて体験談を聞いたり、留学先であるニュージーランド現地校の先生方から直接激励のお言葉を頂く機会を設定することもできた。

しかし生徒が常に前向きな気持ちで取り組めたかという点必ずしもそうとは限らない。英語の勉強や活動の準備が思うように進まずに悩んだ場面もあった。しかし、留学を機にもっと成長したいという強い意志はどの生徒にもあったため、助け合いながら頑張ってきた。

留学を目前に控え、国際理解Gコースの留学

決意表明会を行った。これは関係職員や保護者の前で生徒一人ひとりが留学を乗りこえるための具体的な目標と決意を発表するものである。また同時に、留学までに達成できたこととできなかったことを言葉で明確に表現することで、目標意識をより一層高めさせた。「もっと上手に英語を話したい」「友だちをたくさんつくりたい」「英語の力をのびたい」など目標はそれぞれ異なるが、どの生徒も堂々と力強い口調で決意を表明していた。中には高校入学後、勉強に対して非常に前向きに取り組むようになったという生徒もいる。目標をもつことで、決してあきらめない粘り強さを生徒たちは身につけていた。

プロジェクトはまだ始まったばかりだが、生徒が個々の能力を最大限に発揮できるよう、教師も研究・研鑽を重ねていきたい。



留学決意表明会の様子

引用文献

- (1) 鈴木敏恵 著『課題解決力と論理的思考力が身につく プロジェクト学習の基本と手法』(2015 教育出版株式会社)
- (2) 綾部真雄 編『私と世界 6つのテーマと12の視点』(2014 株式会社メディア総合研究所)
- (3) 犬塚文雄 学習意欲の診断法に関する一研究 (1998 浜松医科大学紀要一般教育 第2号)
- (4) 狩野みき著『世界のエリートが学んできた「自分で考える力」の授業』(2013 日本実業出版社)

参考文献

- 樋口忠彦 編著(代表)『英語授業改善への提言』(2012 教育出版株式会社)
- 佐藤一嘉 編著『フォーカス・オン・フォームでできる!新しい英文法指導アイデアワーク 高校』(2013 明治図書出版株式会社)